

心理学部付属研究所 通信

2012年12月第5号

発行

2012年12月14日

明治学院大学

心理学部付属研究所

所長 金子 健

〒108-8636 東京都港区白金台1-2-37

TEL : 03-5421-5445

E-mail : cccsnr@psy.meijigakuin.ac.jp

所長挨拶

「研究所から地域へ向けて」

明治学院大学は2013年に創立150周年を迎えます。宣教師として来日したヘボン博士夫妻が、1863年（文久3年）に横浜で開いた英語塾がルーツとされます。医師でもあったヘボン博士は、日本の貧しい人々に無料で治療を行ったといひます。その実践を支えた聖書の教え「他者への貢献（Do for Others）」は、明治学院の建学の精神として、今に伝えられています。

この建学の精神を背景に、カリキュラムの基本理念として「ここを探り、人を支える」を掲げて、1990年に文学部心理学科が、そして1994年には大学院心理学専攻がスタートしました。2001年には学生・院生の実習の場として「心理臨床センター」が大学直属の機関として設置されました。

2004年には、明治学院大学で最も新しい学部として心理学部心理学科が独立したことにより、「心理学部付属研究所」が誕生し、相談・研究部門（心理臨床センター）と調査・研究部門として体制が整備されました。軽度発達障害や、精神障害、在日外国人への支援、子育て支援、そして支援システムに関する基礎研究など、両部門の取り組みは多岐にわたっています。

2010年に、教員養成を主たる目的とする教育発達学科が新たに設置されたことにより、研究所は、学校教育や児童生徒の発達に関わる課題への対応を一層求められるようになりました。研究所員である学部の教員は両学科併せて30名におよび、さらに助手やカウンセラー、アシスタントカウンセラーを擁する大きな組織となりました。そこで、2013年度スタートを目途に、再び組織改革への取り組みを始めています。

ますます複雑化する現代社会において、心理学に求められる教育・研究は一層深化し、大学としての地域貢献への期待も高まっています。創立150年を経て、大学も心理学部付属研究所も、成長し続けています。

心理学部長・心理学部付属研究所長 金子 健

研究所各部門主任着任挨拶

調査・研究部門主任

2002年に大学付属の心理臨床機関としてスタートして以来、昨年度で10年が経過しました。その間に心理学部付属研究所に移行し、新たに調査研究を担う部門が設けられ、研究プロジェクトの助成と公開セミナーの開催の2つの事業を主に行ってまいりました。前者は心理学部専任教員と外部研究者や大学院生による萌芽的研究への助成であり、後者は毎年2~3つの心理臨床や特別支援に関するトピックスを取り上げ1日ないし2日間の講義とワークショップを開催し、多くの方々に参加してまいりました。

そして2010年度には教育発達学科が設置されたこともあり、心理学部付属研究所の地域貢献のあり方は、新たな展開が求められる次の10年がスタートしたといえましょう。本学150周年を迎えるとともに、その方向を探っていきたくと思っています。

調査・研究部門主任 藤崎 眞知代

相談・研究部門主任

IT文明が席捲し、スピードや有効性が求められ、規則と法律によって縛られる複雑な現代社会に生きるわれわれは、意識的にしろ無意識的にしろ、この世の中に生きていくだけでストレスを感じ続けています。そして、中にはそうしたストレスに耐えきれず、社会から引きこもってしまう人がいます。また生まれながらにして、みなが当たり前と思っている集団や社会の中で浮いてしまう子どももいます。

そうしたところの悩みを相談したい、でも心療内科や精神科は少し敷居が高いと思っている人々や集団の中で浮いてしまい、他の子とうまいコミュニケーションが取れないという発達に問題をもった子どもたちがやってきます。そういう人たちが休息したり成長したりして、今の社会に適応していけるよう、彼らと悩みや行動を共有し、彼らのところの支援を行っていくオアシスとして、この相談・研究部門（心理臨床センター）があることを願っています。

相談・研究部門主任 阿部 裕

調査・研究部門報告

2012年度 特別研究プロジェクト

テーマ／心理学部附属研究所の近隣地域における実践的地域包括ケアシステムに関する探索的研究

研究代表者／金子 健 (心理学部附属研究所長)

研究構成員／藤崎真知代(調査・研究部門主任)、清水良三(教授)、伊藤 拓(准教授)、横澤直文(助手)

心理学部附属研究所は、2001年10月に相談研究機能をもった大学附属心理臨床センターとして発足し、2004年に調査研究部門と相談研究部門の2部門からなる現在の組織となり今日に至っている。すなわち発足以来10年を経過したのである。

この間、附属研究所は臨床心理士や臨床発達心理士の受験資格を取得するための実習の場であるだけでなく、心理臨床、特別支援等に関する相談業務や、精神医学やカウンセリング・特別支援等に関するセミナーや講座等を開催するなど専門家の研修機関としても機能してきた。

こうしたこれまでの本研究所の取り組みや、2010年度から2年間特別プロジェクトとして行ってきた取り組みを踏まえた上で、生涯発達の視点から様々な年代の人々や、共生社会という視点からも同時代に生きる人々のニーズに応えつつ繋げていくことが、今日、本研究所の地域貢献としての責務であるといえよう。

実践的地域包括ケアシステムとは、地域福祉の構成要素である様々な援助活動をバラバラに展開していくのではなく、これらを有機的に繋げ、全てを統合することによりそれぞれの活動を一体的に(包括的に)切れ目なく展開させていくシステムのことである。つまり、ニーズの発見から支援、さらには地域づくりに至るまでの取り組みを一貫的に進めていく仕組みである(小坂田, 2011)。

そこで本研究では心理学部附属研究所の近隣地域において、様々な属性からなる住民の心理的 well-being の向上に寄与できるような実践的地域包括ケアシステムのあり方を検討することを第一段階の目的とする。そして、本研究近隣地域の地域特性に即し、かつ心理的支援ニーズの高い現場や支援内容に限定し、実現可能なプログラムの開発および支援・介入を探索的に試み評価を行いつつ、行政への提言及び協働の可能性を探索することを最終目的とする。

本年度は、まず行政としての施策の実態を把握すると同時に、近隣地域住民のニーズ調査及びモデル事業となり得る施設見学を中心に行い、第一段階の目的の達成を目指す。

引用文献

小坂田稔(2011) 地域包括ケアとは何か―「地域包括ケアシステム」の考えをもとに考える一住み慣れた地域でのいきいきとした暮らしづくりに向けて 作業療法ジャーナル, 45, 551-559.

萌芽研究プロジェクト (1)

子どもを理解し支援できる人材育成のための教育プログラムはどうあるべきか
―現場体験による学び(体験活動)は、心理学教育に有効か―

教育発達学科では心理学を基盤としながら教員養成を行う学科として、子どもの心を理解し支援できる人材の育成を目指している。そのカリキュラムの大きな特徴の一つとして「体験活動」があり、学生は年間を通して実際の学校現場での児童支援に参加している。体験活動での学びが教員等の立場で心理学を活かすことに繋がるためには、学生への指導内容などの工夫が重要である。本研究では、体験活動と他の類似した教育プログラム(心理あるいは教員養成における実習、インターンシップ、サービスマニカ等)との比較を通して、体験活動プログラムの特質と相違点を明らかにするとともに、改善点についても検討する。(助手 川淵竜也)

萌芽研究プロジェクト (2)

学士力育成のための電子ポートフォリオを活用した評価システムの開発と試行

本研究の目的は、電子ポートフォリオによる学習成果の評価方法の確立とその活用方法の精査である。現在、ディプロマポリシーにそった評価項目を各授業ごとに整理し、それをどのように電子ポートフォリオ上に表示していくのかを検討している。また、電子ポートフォリオの活用方法の開発のために、少数の学生に実際に電子ポートフォリオを使用してもらい、その使用状況を細かく調査分析している。(教授 水戸博道)

萌芽研究プロジェクト (3)

学生に大学での学びの成果を実感させ、
新たな課題を発見させるための学科プロジェクトの推進

小学校や幼稚園、療育施設等の見学や実際に子どもたちと触れ合う場を学生自身が企画し運営・実行する活動を通じて、自らの課題を発見し追求していく力を持った学生を育てることを目的としている。

具体的には、幼児・小学生を対象にした読み聞かせ教室の開催、子どもと身体を使って遊ぶ方法の研究、療育施設での研修等を予定している。(准教授 出井雄二)

萌芽研究プロジェクト (4)

教育発達学を構成する授業科目における、
学士力育成のための教育内容及び方法の見直しと改善

教育発達学を構成している授業科目の中で培われる、心理支援力、発達支援力、教育実践力等の学士力を捉えるための一つの観点として、学習プロセスについての評価の在り方に焦点を絞り、検討を進めてきた。具体的には、ラーニング・ポートフォリオやティーチング・ポートフォリオ等を中心に、授業評価に関する理論的な検討を行うとともに、本研究担当の教員が自分の授業についてポートフォリオ評価を試み、授業評価に関する実証的な検討を行ってきた。(教授 松村茂治)

相談・研究部門報告

ゆいま～るの様子

心理学部附属研究所の相談・研究部門である心理臨床センターでは、個別相談の他に、独自のプログラムを行っております。ここでは、2011年度より新たにスタートした取り組みを紹介いたします。

発達障害は一見、障害とはわかりにくく、子どもの問題行動を「親の育て方の問題」と誤解されることが多くあります。そのため発達障害の子をもつ保護者は傷つきも多く、様々な悩みを抱えています。

心理臨床センターでは2011年度より、就学前の発達障害の子をもつ保護者を対象とした白金ペアレンツクラブ「ゆりの木 プチ」を行っております。なんとなく育てにくい、言葉が遅い、落ち着きがない、友達とうまく遊べない、など幼児期特有の話題についてカウンセラーから



情報提供するとともに、保護者同士で悩みを共有する場となることを目的としております。2012年度からは小学校低学年の子をもつ保護者まで対象を広げ、より多くの保護者に安心して参加頂ける場となるよう、取り組んでおります。

また、当センターには心理士が在籍し、日々の相談業務にあたっている一方で、心理学研究科に在籍する大学院生にとっての実習の場としても機能しております。しかし、それぞれの業務や実習にあたるなかでは、両者がともに先輩後輩として臨床を学び合う等、関わりを持つ機会は少ないのが現状です。そこで、上記のような交流を目的として、2011年度より、大学院生のキャリア支援のためのプログラム「ゆいま～る」を開催することに致しました。

当該プログラムは年に4回ほど開催しており、院生生活や心理の仕事で関心のある分野・キャリアプランなどをテーマに、気軽に話せる場を共に作り上げられるよう努めております。今後も、大学院生のニーズに合ったテーマを提供できるよう日頃から大学院生の声に耳を傾け、臨床の先輩とともに学び、後輩を育てていく工夫をし続けていけるよう取り組んで参ります。

2011年度受付ケース相談分類

相談分類		件数	合計
社会生活面	職場不適応	2	41
	学校不適応	11	
	対人関係	10	
	家族関係	14	
	夫婦関係	4	
行動面	引きこもり	1	6
	嗜癖	1	
	摂食障害	1	
	吃音	2	
	チック	1	
精神症状	抑うつ	2	10
	不安	1	
	情緒不安定	3	
	解離症状	1	
	妄想・妄想様観念	1	
	強迫症状	2	
性格面	同一性	1	3
	適性の問題	1	
	人格障害	1	
発達面	知的障害	4	59
	自閉症スペクトラム	52	
	落ち着きのなさ(ADHD)	2	
	言葉の遅れ	1	
その他			2
合計			121

2011年度心理臨床センター利用者数(延べ)

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
初回面接	9	8	14	15	6	16	11	8	12	4	9	9	121
継続面接	118	126	123	141	108	124	145	133	121	128	120	164	1551
個人/集団指導	4	9	9	8	0	6	8	7	7	5	5	3	71
心理検査	0	2	3	1	7	7	3	3	1	1	2	3	33
PDDの子ども向けグループプログラム	0	16	16	15	5	18	15	17	12	10	13	6	143
復職支援アカデミー	0	0	3	5	0	0	0	3	5	0	0	0	16
親の会「ゆりの木」「ゆりの木プチ」	0	13	0	13	0	16	0	16	0	0	17	0	75
合計	131	174	168	198	126	187	182	187	158	148	166	185	2010

あなたのことを
変えたい

明治学院大学心理臨床センター

学校、対人関係、性格、子育ての悩み・・・

お気軽にご相談ください。

予約電話

03-5421-5444

受付時間

月～土曜日 午前10時～午後6時

ホームページ

<http://psy.meijigakuin.ac.jp/clinic/>

※ホームページからのご相談の予約はできません。

お電話のみの受付となります。

公開セミナー報告

当研究所では、これまで「カウンセリングセミナー」「精神医学セミナー」および「精神分析セミナー」の三本のセミナーを開催してまいりましたが、2012年度より、名称を「心理学部附属研究所主催公開セミナー」と変更し、より幅広い分野のセミナーを展開していくこととなりました。新しいスタートとなる今回は、心理学科と教育発達学科、それぞれの専門分野から、下記のようなテーマを掲げたセミナーを開催いたしました。

公開セミナー 1

多様化する子どもたちの学びを
支援するために
—通常の学級での支援について考える—

開催日時：2012年9月15日(土) 10時～17時

講師と講義テーマ：

松村 茂治 (明治学院大学)

「多様化する子どもたちへの支援」

辻 宏子 (明治学院大学)

「子どもは本当に算数が嫌いか……」

岩辺 泰吏 (明治学院大学)

「どの子ども楽しんでできる言語活動の授業」

〈総評〉

教育発達学科が企画をした「多様化する子どもたちの学びを支援するために」では、通常の学級における学習の保証をテーマに、2本の講義と1本のワークショップを実施した。

はじめに、学習の遅れについての従来の考え方を整理した後、個に応じた支援の必要性とその実際について概括的な説明を行った。次いで、算数の教科を題材に、「つまずき」とは何なのかという「根源的な問題について検討した後、子どもが「わかる」授業の在り方について、算数の実例を用いて講義が進められた。最後のワーク



ショップは、教科としては国語科に属する内容だが、字句の理解や文章の読解といった通常の国語の学習活動ではなく、全員

参加型のグループ活動（数人のメンバーによる推理ゲーム）を通して、多様な言語活動によるコミュニケーションを体験するものであった。

教育に特化した内容であったこともあって、参加者のほとんどが教員であり、少人数の参加者ではあったが、終始和やかな雰囲気の中でのセミナーであった。参加者の残したアンケートから、多くの方が満足して受講されたように思われた。 (教育発達学科教授 松村茂治)

公開セミナー 2

心理療法の行きづまりとその打開
—心理臨床家としての危機と成長—

開催日時：2012年9月30日(日) 10時～17時

講師と講義テーマ：

野末 武義 (明治学院大学)

「心理療法におけるジェンダーの問題」

岩壁 茂 (お茶の水女子大学)

「心理療法の失敗事例から学ぶ」

平木 典子 (IPI 統合的心理療法研究所)

「共感的理解から共感的応答へ」

〈総評〉

今回のセミナーは、学部生から臨床経験30年以上のベテランの臨床心理士まで、多くの方にご参加いただきました。3つの講義は、いずれもこれまではほとんど取り上げられてこなかったテーマなだけに、参加者は非常に熱心に耳を傾けていたようである。終了後のアンケートを見ると、「ふだん意識していなかった問題に気づかされ、自己理解の重要性を再認識した」「なかなか他では聴ける機会がないテーマだったので、貴重な学びの機会になった」「自分が経験したケースと照らし合わせながら理解することが出来、今後の関わりのヒントが得られた」「続編を開催して欲しい」など、大変好評であった。欲を言えば、もう少し時間を使って、ワークやグループ・ディスカッションができると、より深く学べたのではないかと思う。今後も、臨床現場で心理臨床家が直面している課題を取り上げ、心理臨床家としての成長に役立つようなセミナーを開催していければと思う。

(心理学科准教授 野末武義)

